

行動指針 1 家庭で、地域で、学校で。大人からあいさつをしよう。

「あいさつ」とは相手の存在を認めること

あいさつは、単に「おはよう」「こんにちは」といった言葉を声に出すことではありません。相手の存在を認めていることを積極的に伝える、相手を思いやる行為です。

自分があいさつをして、相手があいさつを返さないことと不安に思うことがあります。これは、相手が「自分の存在を認めていない、自分のことをよく思っていないのでは?」と感じるからです。この「思いやりの心」の原点としての「あいさつ」を、大人も子どもも交わしていきましょう。

大人からのあいさつが大切

子どもがあいさつする頻度と、周囲の大人などからあいさつされる頻度には関係があります。子どもの自発的なあいさつ行動を定着させるために大人からの働きかけが大切です。また、周囲の人びととあいさつを交わすことは、地域の交流を促し、子どもの地域への愛着を深めることにもなります。

新型コロナウイルス感染症が流行し、他者と関わることを控え、家にこもってしまいがちです。こんな状況だからこそ、マスク着用など対策をしたうえで、家庭や学校はもちろん地域でも、大人から積極的に声をかけ、みんなで地域を愛する子どもを育てていきましょう。

(東京都健康長寿医療センター研究所社会参加と地域保健研究チーム(2020)「児童・生徒のあいさつ行動と地域愛着および援助行動との関連」日本公衆衛生雑誌第67巻第7号参照)

行動指針 2 みんなで子どもが体験できる場をつくろう。

自己肯定感の低い日本の子ども

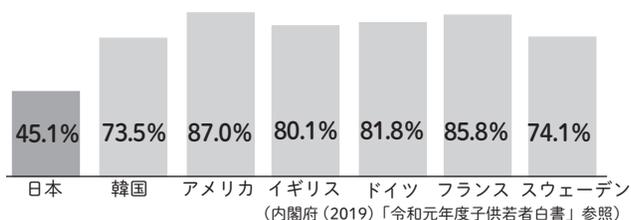
自己肯定感とは、「ありのままの自分を肯定的にうけとめる気持ち」です。自己肯定感が高い子どもは、物事に取り組む意欲が高く、良好な人間関係をつくれる傾向にあります。子どもが成長し、より良い社会の担い手となるためには、自己肯定感を育むことが大切です。

しかし、調査の結果、日本の子どもは諸外国の子どもと比べ、「自分自身に満足している」「自分には長所があると思う」など、自分を肯定的にとらえている子どもの割合が低いことがわかっています。



自分自身のイメージについての国際比較

質問 「自分自身に満足している」に対して「そう思う・どちらかといえばそう思う」と答えた若者(13~29歳)の割合



自己肯定感を育む体験活動

子どもの自己肯定感を育むには、自然体験や集団宿泊体験、奉仕体験といった体験活動に参加することが効果的です。体験活動を通じて、達成感を得るとともに、失敗を経験したとしても他の人から自分の努力が認められることで、次の課題に前向きに立ち向かう姿勢を身につけることができます。

調査でも「海や川で泳ぐ」「昆虫をつかまえる」など自然体験が豊富な子どもほど、自己肯定感が高い傾向にあることがわかっています。この傾向は、「小さい子どもと遊んであげる」などの生活体験、「買い物のお手伝いをする」などのお手伝い体験においても同じです。

(国立青少年教育振興機構(2019)「青少年の体験活動等に関する意識調査(平成28年度調査)」参照)

家庭や地域でも体験できる場をつくろう

学校教育では、体験活動が積極的に取り入れられていますが、同じように、家庭や地域でも体験の場をつくっていくことが大切です。

また、市内の青少年育成団体では、家庭で十分な機会を提供することが難しい自然体験や多世代・異年齢交流など、子どもが成長できる場を提供しています。新型コロナウイルス感染症対策をしたうえで活動しますので、参加してみましょう。



お役立ち情報 八王子市青少年育成団体(子ども会、ボーイスカウト、ガールスカウト)の紹介



体験できる場をつくるためのヒント

子どもが体験できる場をつくるため、家庭や地域で次のような活動をしてみましょう。その中で、子どもの良いところを積極的に褒めましょう。特に、子どもが体験活動をうまくできなかった場合でも、子どもの努力を認めてあげることが大切です。

家庭でできること

- ・日ごろから、ちょっとしたお手伝いをさせる。
- ・公園やキャンプに出かける。
- ・地域行事や青少年育成団体の活動に子どもを参加させる。

地域でできること

- ・あいさつ運動などをきっかけに、子どもや保護者との距離を縮め、地域行事に参加しやすくする。
- ・青少年健全育成団体などと協力し、子どもが参加したくなるような体験の場を企画する。